
とある科学の能力模写（コピーキャット）

アンリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の能力模写^{コピーキヤット}

【Nコード】

N2326Q

【作者名】

アンリ

【あらすじ】

科学と魔術が交差する町「学園都市」。外部の技術よりも数十年は発達としている科学の街で繰り広げられる物語。少年は数ある試練を乗り越え、一步一步自身を高みへと鍛え上げていく…

注意：この作品はオリキャラが出ます。しかも主人公格として登場させますので、やたら出てきます。そういったことが苦手な方はご遠慮ください。

プロローグ（前書き）

やたら長いです。

本当だったらす話くらいに分けて連載しようかと思いました。

プロローグ

夜は深く闇を広げている。

それもそのはず、すでに完全下校時刻は過ぎていて、この学園都市に住む230万人のうちの約8割に当たる学生は就寝に備え食事をしたり湯浴みをしている時間だ。

東京都の3分の1程の面積を持つ学園都市が静まり返る時刻。といっても残り2割に当たる人間が深夜の学園都市の治安を維持するために奮闘していたり、能力者の開発、研究を不眠の勢いで進めている人達だっているのだが。

そういった人達の通り道になるだろう場所には街灯が並び、深い闇に輝きを与えてくれているのだが、もちろん資源とは無限に存在しているわけではない。

例えば夜間使われないであろう小学校の校庭を危険性からライトアップする、というのは限りある資源の無駄遣いだらう。

同じような理由で河川敷の開けた広場はこの時間、星々の煌めきにのみ照らされ、その微弱な光によって辛うじて辺りを見渡せる、といった具合になっている。

そんな人が寄り付かない夜の河川敷に2人の男女が睨み合うように向かい合っていた。

しかも本来なら帰宅していなければいけない学生の2人がだ。

1人は茶色の短髪をした少女。

能力開発のために集められた子供達は学生として学校へと通うのだが、彼女は学園都市内部に数ある学校の中でも超名門校と呼ばれるお嬢様学校、常盤台中学で指定されている学生服を着用している所を見るとその超名門校に属していると考えるのが妥当だろう。

こんな夜分に制服を着用することはそれだけで『警備員』アンチスキルに補導さ

れるリスクを高めることになるのだが、彼女が通う常盤台中学は外出時の制服着用が義務付けられているため、こんな時間でも制服を着ていなければいけない。

義務化することで外出時に生徒の品行方正を意識させる他に夜間外出を防止する等があるのだろう。

…が少なくとも今河川敷に立つ彼女には関係なかったようだ。

その彼女から数歩離れた位置に立つのは、見るからに彼女よりいくつか年上の男子生徒。

オールバックに固められ、額には固め損なった前髪が数本垂れ下がっている黒髪の少年だ。

…いや学生服を着ていなければ少年とは形容しがたい。

少年と向き合う彼女が160cm程ならば、少年…いや彼は180cmを越えているのではないかと伺えるほどの高身長なのだ。

それだけではなく既に風貌に子供特有のあどけなさが見受けられず、整った顔立ちを形成していることも要因の一つだろう。

そんな端から見ると兄妹…最悪親子にも間違えられかねない2人が、淡い星の光にのみ照らされる河川敷で睨み合うように…いや現に睨み合って向かい合っている。

2人の間を通り抜けるように暖かな微風が砂埃を舞わせた。

それを合図に少女が右手を大きく振りかぶって、少年に向かい振り下ろした。

…といっても彼女の小さな掌には何も握られていない。

何かを投げつけた訳ではない。

…しかし少年はそれを見るや否や汚れることも厭わず地面に飛びつくように横へと避けた。

その直後少年が元居た場所に青白い閃光が通り抜けていく。

青白い閃光の正体は電撃…それも雷のように視認できる強力なものだ。

そんな自然災害のような現象を起こしたのが紛れもなく右手を振り下ろした少女であった。

学園都市とは東京都の3分の1ほどの面積を持ち、学園都市を囲むように建てられた高さ5m、幅3mの外壁によって外部と空間を遮断している場所である。

学園都市内部は外部より数十年は進んでいると言われている科学技術を利用して、外部から集う子供達の能力を開発する場として認識されていた。

能力開発とはただ単に子供達の才能を見つけ、それを育てていく…という訳ではない。

数十年進んだ科学技術を利用して、子供達の脳を開発することで超能力を発現させることを能力開発と呼んでいた。

超能力：という「バイロキネシス発火能力」や「テレポート空間移動」などが浮かぶと思うが、正にそれを科学的に理論づけ、1人の人間が持つ「自分だけが持つ現実」パーソナルリアリティを観測することで本来はありえない現象を発現させることができるようになる。

この能力とは1人につき一つずつしか発現しないもので、しかも全ての子供たちが超能力を発生させることができるというわけではない。

現に学園都市に住む学生の約6割は無能力者（レベル0）であるとされていた。

その学生の中でも能力開発に成功し、さらに学園都市に7人しかいない能力者の中でも最高位と格付けされた超能力者に、今右手に電撃をまとい、それを放った少女：「御坂美琴」も含まれていた。

「よかった。あいさつ代わりに一発で終わっちゃったら、退屈してたところだわ。」

地べたに這いずりまわって自身の能力である電撃をよけた少年に、常盤台の制服である半袖のブラウスの上にサマーセーター、プリッツスカートをはいた少女は凜とした声で話す。だがその少女然した声に怒気が混じっていた。

「たくつ… ちょっとは手加減しろっての。こっちは『空間移動 レベル2』なんだぞ？」

いきなり命の危険を感じるほどの電撃を飛ばされた少年はどうやら無傷のようで、ぶつぶつと文句を言いながら砂で汚れてしまった白のYシャツと黒のスポンを払っている。

「あんたから仕掛けてきた勝負でしょ？」

「やりあう前に一服くらいさせてくれ、って意味だよ。」
彼はそういうと右手に持っていたお茶のペットボトルを開けて、どの湯きを強調するようにぐびぐびとお茶を飲み込んでいった。

「たくつ…」

今まさに手汗を握るような勝負が始まったと思ったら、急にその相手が飲み物を飲み始めたということに美琴は右手で額を抑えるように頭を抱えた。

「そんなくらい別にいいじゃねえか。それに勝負を仕掛けたのは俺かもしれないが、その原因を作ったのはお前だろ？」

頭を抱えているうちにお茶を飲み終えた少年が渋い表情をしながら文句を言っているが、そんなことは美琴にとって関係がない。

そう、ようやく勝負ができるのだ。

「あつ…ちよつと待った。」

「…何よ？」

と思っていた矢先、またしても少年は戦いの雰囲気の水を差す。

先ほどまでもそうだが、美琴に不機嫌を隠すような態度はない。

お嬢様学校といわれる常盤台中学において才色兼備を誇り、同輩後輩に羨望のまなざしを受けている美琴だが、その実態はお嬢様とイメージして浮かぶようなものではなく、正義感が強く勝気で頭よりも体が先に動くような人物なのだ。

まるで『戦闘狂』のような一面も含まれているが、それは生来のものである重度の負けず嫌いからなるものであることは美琴も何となくではあるが理解している。

その戦闘狂と化している美琴を止めた少年は大胆不敵な笑みを浮かべながら、両手を開いてあげる。

その姿はまるで白旗を上げているかのようにこれまた美琴の逆鱗に触れる。

「…あんた、自分から仕掛けてきたのに降参するっていうの…」

「違う違う。俺が言いたいのはそのなことじゃない。」

「じゃあなんだっていうのよ！早くしないとその生意気な面に電撃をぶち込んで…」

「俺がさっきまで持っていたペットボトル…どこ行ったと思う？」

その一言は熱くなりすぎた美琴の頭を冷やすには十分だった。

先ほど頭を抱えていた瞬間…つい美琴が油断して彼から目を離れたとき、彼はペットボトルに何かをしたのだろうと美琴は考える。

その証拠に彼が所持していたペットボトルは足元を見渡しても落ちているということもなく、忽然と姿を消していた。

先手を取られたと焦る美琴がにやにやと笑いながら両手をあげてい

る彼を注意して見ると、彼の右手がいつの間にか美琴の頭上に向かって指をさしていた。

そこで美琴は先ほど彼が言った言葉を思い出した。

『こっちは空間移動 レベル2なんだぞ』

美琴は慌てて頭上を見上げた。

空間移動：触れた物質や自身を能力者自身が意識的に転移させる、230万人いる学園都市に58名しかいないほどの稀有な能力だ。その能力を使えば物を簡単に隠すことも可能だ。

そして：頭上に転移することで重力という万物共通に受ける力を利用して相手にぶつけることだって可能だ。

彼はすきを突いてさっきまで飲んでいたペットボトルを頭上に転移したのだろう、と学園都市有数の演算能力を持つ美琴はすぐさま行き着いたのだ。

「…ってあれ？」

しかしその美琴の推理は簡単に覆された。

頭上には淡い光を放つ月や星以外何も見当たらない。

緑色をしたペットボトルはもちろんのこと、鳥の姿でさえ確認できなかった。

(じゃあどこに!?)

「まあ後ろのポケットに入れといただけだけだな。」

「なあっ!?!?」

くるっと反転した少年を見ると先ほどまで飲まれていたペットボト

ルが無理やり差し込むようにして収まっていた。

「簡単に人の言うこと信じちゃって…かわいらしいとこあんじゃん。」

まるで勝利したかのような高笑いを始める少年。

風貌は大人びているようだが、精神は付いていけてないらしい。

そしてまんまと少年の策にはまった美琴は恥ずかしさのあまり赤面するのを止められない。

…ただしそれだけで終わらないのが美琴のお嬢様然としないところである。

「ふ…ふつ…ふつげんなコラッツ!!!」

先ほど同様右手を振りかぶって…しかし今度は先ほど右手に帯びていた青白いものよりも数段強い光を輝かせながら…先ほどまでとは違い、少しの殺意を込めて数倍の威力に達していきそうな電撃を放った。

高笑いしていた少年はすぐさま先ほど同様横へ跳び、間一髪のところで電撃を避けた。

「ちょこまか動くんじゃない!」

「それは死ねって意味か!」

「その通りよ!」

その後も少年をめぐけて放たれる強大な電撃を俊敏にかわすといった展開が続いた。

あまりの膨大な電撃を前に少年はすきを突いて拾った小石を投げるのが精いっぱいだ。

美琴はその子供のような攻撃をいちいち電撃で払いのけ、お返しと

ばかりに電撃を放つ。

少年は小石での攻撃以外に有効打を打つことが出来ずにいた。それもそのはずこの勝負は学園都市最強と謳われるレベル5と下から数えたほうが早いレベル2の戦いなのだ。

レベル2が日常生活において便利と感じるか否かの瀬戸際の力だとしたら、レベル5は単独で軍隊と渡り合えるほどの力を有していると表現できるくらいの差があるのだ。

それは単純明快に覆せない壁。

美琴の後輩である白井黒子の言うように彼女は優しすぎるためか本気で殺しにいつているわけではないので、たまたま彼でも避け続けることができていただけだ。

美琴が本気を出すことなくとも、体力がなくなり動きが鈍くなってくれば手加減している電撃が彼の体を貫くだろう。

それまで美琴は相手の空間移動による攻撃が行われるタイミングに注意しつつ、同じことを繰り返していればいい。

なぜなら空間移動といってもレベルは2なのだから、物は飛ばせても自身を飛ばすことはできない。

空間移動能力者は自身を転移させることができるようになって初めてレベル4と認定されることは黒子から伺っている。

なので背後に回っての攻撃などもレベル2の彼には考えられない。いずれ頭上に何かを転移させて攻撃してくるだろうが、それも今度は能力を使う瞬間をしっかりと見ていれば軽々対処できる。

美琴は熱くなっている頭でも冷静にこの戦闘の詰みを想定していた。
(もうすぐ10分は経つし…そろそろかな?)

電撃と小石が飛び交いあう河川敷。
戦闘が始まって30分もしたところでようやく息が上がってきたらしい。

…ただし大きく呼吸を繰り返すのはいまだ電撃を間一髪で避け小石を投げ続ける少年ではなく、小石を防ぐ以外はただ一方的に攻撃を繰り返していた美琴のほうだった。

(くっ…どうしてあいつはあんな動けるのよ!?)
30分間美琴を中心に右へ左へ電撃を避け続ける少年を見ながら美琴は戸惑いを隠せないでいた。
圧倒的優位に立っていたと感じていた自分が能力の過剰行使によって息絶え絶えになっているのに対し、30分間動き続けている少年は息を切らすこともなく、ただ攻撃のすきを突いて小石を投げてる。

その人間離れした体力に美琴は焦りすら感じていた。

(このまま避け続けられたら私が先にダウンしちゃう…)
たとえレベル5といっても無制限に能力を行使できるわけではない自分だけの現実を現象化することには高い演算能力が必要とされていて、それはレベル5といえど変わりはない。
この際演算能力が高い者ほどレベルが5へと近づいて行くのだが、その演算には高い集中力が必要とされる。
人間は集中力を長く保つことはできず、せいぜい60分前後が集中力の持続限界とされている。
またそれがより高い域での集中力となると、そのタイムリミットは知らずのうちにとんとんと減っていくものだ。
その結果として電撃を放つだけでほとんど動いていない美琴が息を切らす理由だ。
そしてそこで美琴は少年の狙いが読めた。

(こいつ…こっちのエネルギー切れを狙ってるんじゃない)
自身の持つ空間移動の能力をまったく使わず、小石でしか攻撃してこなかったのは防御に電撃を使わせることが目的だったのではない

のだろうか和美琴は考えたのだ。

そしてそれに気づいてしまえば美琴も馬鹿ではない。

先ほどから飛ばしていた電撃を少しばかりセーブし、時たま来る小石を電撃で対処することなく右へと体を動かすことで対処するようになった。

その変化にも少年は行動を変えず、せいぜい小石の投げる感覚を少し短くした程度だった。

そうして再びイタチゴッコが続くこと10分、ついに美琴が攻撃の手を止めた。

「…どうやらあなたの策にまんまとはまったみたいね。」

「そりゃどうも。…それじゃあ俺の勝ちってことでいいか？」

「冗談。まだ勝利条件である『相手より先に一発当てる』ってのをそっちも達成してないじゃない。ただそろそろ電撃を飛ばすだけってのも飽きてきたから、新技の練習台になってもらおうかなって思っただけよ。」

美琴の額にも汗が滲んできたがそれに構うこともない。

それよりもただ目の前の相手を屈服させることに全神経を向けていた。

美琴は右手をゆっくりと前に出す。

先ほどまでとは違う雰囲気、少年は警戒心を高めた。

すると美琴の手に黒い砂のような物体が集まりだし、それが一つの形をなすように動き回った。

これには少年も驚きを隠せないでいた。

美琴が持っていたのは黒一色に染まった剣。

けして学生が日常生活で持っているようなものではないことだけは言える。

「おいおい…剣なんか作ったって息が上がってるお前じゃ俺を捕えられないってことぐらい、常盤台のお嬢様には分からなかったのか？」

「これはね、土中に含まれている砂鉄を引っ張り出して形を保ったものの。それを高速で振動させてチェンソーみたいになっているから触るとちよーっと痛いかもね。」

「…はっ？…それ触った瞬間体とお別れするレベルの凶器だろ！？」

「だから…必死に逃げなさい！」

勝利を確信したかのようにほほ笑む美琴は自身の作り上げた砂鉄の剣を縦に振りおろした。

しかし美琴と少年の距離は最初の立ち位置と変わらず、数歩ほど離れているため剣は当たることなく振り下ろされる。

もしそれが普通の剣ならばそうであろう。

しかしこの真つ黒の剣は御坂美琴自身が作り出した特殊な剣だ。

その切っ先は美琴の能力によって剣の形を維持していたが、それは美琴が剣のイメージを保っていることで初めて行える。

すなわち何を言いたいのかという…その砂鉄の剣は美琴のイメージ次第で…能力の行使の仕方次第で砂鉄の斧にも砂鉄の弓にも…そして砂鉄の鞭にもなるということだ。

「なっ！？」

突如剣が伸びて少年の頭上をたたくように降り下ろされた。

もちろんこれが当ればたたいたなんて生易しいもので終わるわけがない。

これは先ほどの真つ黒の剣と変わらず、砂鉄が高速に振動してチェンソーのように刃先が動いているのだ。

それこそ体と体が簡単にお別れするほどの凶器だ。

もちろん美琴は当たる直前に能力を解除してけがを負わせないよう

に考えてはいるが、そんなこと少年に葉関係ない。

先ほどまでも必死だったが、今度はさらに気合を入れて砂鉄の鞭をかわしに行く。

危機一髪のところ回避したものの、砂鉄の鞭はそのまま地面に勢いを保ったまま激突しその振動している自慢の刃の効果で砂埃を高く舞いあげた。

砂埃が舞ってしまったためお互いの姿は見えない…しかし美琴には彼のいる位置がしつかりとわかった。

それは彼女が持つ『電撃使い（エレクトロマスター）』の力の一つであり、人間の出す微弱な電磁波を正確に読み取って位置を把握することができるのだ。

（左へ移動中… ってことはやっぱり当ってはないみたいね。それじゃあ砂煙から出てきたところを狙って電撃をくらわせてやる！）
この時美琴はまたしても手加減をしていた。

相手の位置がわかるのだから砂煙越しに砂鉄の鞭を水平に振るうだけで、相手はとっさの横なぎに避けることは普通できないのだからそれが分かりつつも美琴がやらなかったわけにはやはり砂鉄の鞭は殺傷能力が高すぎたことがあげられる。

たとえ美琴が制御しているものといっても一歩間違えれば大惨事にもなりかねない。

これはそんな武器だ。

戦闘狂とはいえ人を傷つけることには抵抗を感じるのだから、美琴はまだまだ中学生のお嬢様であると言えた。

（それに後で適当に狙って当たただけだろ、なんて難癖つけられても面倒だしね。…砂煙から抜け出すまで3…2…1…）

そして美琴の読み通り寸分狂わず少年は砂埃から姿を現した。

急に視界が晴れたところでの無防備な姿に一撃を…そう考えていた美琴は右手を振り上げ後は相手に向かって下ろすだけ…という体勢になっている。

…そのため視界が晴れたと同時に相手が倒れるように小石を投げた時、それを認識するのに少し時間がかかった。

(なっ!?!私が電撃出すタイミングを読んだ!?!)

小石は寸分たがわず美琴の胸めがけて飛んでくる。

ここで小石を電撃で焼き切れることはたやすいが、それではまたイタチゴッコを繰り返すことになってしまう。

そうなれば体力的に限界が近付いている自分が先に膝を屈してしまふ可能性は高いだろう。

ここで美琴は小石を避けて相手が行ったようにカウンターの要領で電撃をぶつけることを選択した。

といってもこの小石を避けるのは攻撃態勢に入った美琴には少し遅すぎた判断だった。

あと30cmといった付近まで急速に近づいてきている小石を今から避けようとなるとどうしても体が付いていかず、ぎりぎりかすめてしまうだろう。

『相手より先に一発当てる』というルールでは不本意ながら負けということになってしまう。

それでも避けるという選択肢を選んだのはもちろん避けれる自信があったからだ。

スポーツ万能といわれる美琴でもそれは女子中学生の観点からみた場合であり、プロの格闘家のような身のこなしは不可能だ。

…ただしそれは能力を使わない時に限る。

美琴が行おうとしていること…それは自身の体に電気信号を意図的に流し、一時的に反射神経を高めるといふ荒業だった。

反射神経が高まったことにより、通常達人クラスでない限り避ける

ことがかなわない小石を美琴は見事に右へと飛びのいてかわした。

（よしっ！上手くいった！あとはあいつに電撃を…）
そこで美琴は再び勝利を確信したと判断し、つい笑みを浮かべてしまふ。

しかしそれも仕方ないであろう。

相手は地面へと倒れていて、圧倒的な身体能力を持ってしても電撃を避ける暇すらないのだから。

もらった、といわんばかりに美琴は全力で右手を振り下ろす。

…まさにその瞬間倒れ伏せている少年が勝利を確信したかのように笑みを浮かべた。

コンッ！

「イタッ…」

何かが頭にぶつかる音が体中を駆け巡る。

予期せぬ衝撃に人間は弱いもので、対して痛くはないのに自制心よりも驚きが勝つてつい『痛い』と声をあげてしまふ。

まさに今の美琴はそんな状況だった。

対して痛くもない衝撃につい声が出てしまったのだ。

また驚きのあまり演算し、右腕に絡まりつくように発現していた電撃も霧散してしまふ。

「一発だ。俺の勝ちだな。」

そこで地面から立ち上がった少年が勝利宣言を、呆然としている美琴に対して嬉しそうに行った。

美琴はそんなことに気にも留めず、自身に衝撃を与えた物体を探した。

そしてそれはすぐに見つかる。

「ペット…ボトル。」

「そうだ。小石での攻撃はフェイク。本命は上空からのペットボトル攻撃だったんだよ。」

美琴の足元には先ほどまで少年が飲んでいた緑のペットボトル。つまり砂煙で身を隠した隙に、頭上へと転移し避けたところに行き隙をついたのだという。

「そんなの私が避ける方向次第で当たるか当たらないかわわつてくるじゃない！」

「だからできるだけ間違えないように何度も試したんだよ。何回も小石を投げて…な。」

「なっ!？」

「そしたらお前は小石を右に避けることが大半だった。だから後はそれを信じてトラップを設置しただけだよ。」

少年は土まみれになった制服にしわを寄せるが、もうクリーニングに出さないといけないと取れないとでも判断したのだろう、土を払い取ることすら行わない。

それよりも少年は汗をびっしょりとかいた体を冷ますように、パタパタと自らの手を仰いで少しでも風を作り自らに当てていた。

そんな戦闘の緊張感から抜け出している少年とは違い、美琴は衝撃を受け言葉も出ない状況にいた。

(私の戦闘パターンの癖を読みながら戦ってたって言うの!? 私が言うのもなんだけど、あれほど苛烈な攻撃をよけ切りながら明確な勝利方法を思い付いていたなんて考えられない…)

「それじゃあ俺は先に帰るから、お前も警備員に見つかる前に帰れよ。」

「ちよっ…ちよっと待ちなさいよ！」

そんな驚愕の表情を浮かべる美琴を少年は『何か考え事してるんなら邪魔しないように帰るか』といった親切心からそっと帰ろうとしたのだが美琴の叫びのような声に止められてしまう。

「なんだよビリビリ？お兄さんは明日も早いから早く帰って疲れた体を休めたいんだけど。」

「あんたまでビリビリ言うなっ！…それよりあんたの名前聞いてなかったんだけど…」

「いや名乗るほどのものではないので…」

「ほう？それは私がそんな大したことのない村人Aに負けるような雑魚だと言いたいわけ？」

「深読みして帯電すんじゃないねえ！…たくっ、俺の名前は巽。たつみりょう巽つみだ。」

少年…巽はめんどくさそうにだがしぶしぶと自分の名前を口にした。

「巽…ね。次は絶対負けないんだから！」

「いや！？これで負けたらもう追っかけまわさないんじゃないのによ！？」

「それはあんたの連れのほうよ。あんたに対しての約束じゃないし…たまたま会ったときに勝負挑むくらいなら文句ないわよね？」

「むしる文句しかないわ！」

巽は美琴から逃げるように…いや実際1mmでも離れたく、全力で河川敷からロゲアウトした。

美琴が何かを叫んでいるが彼の耳には届いてない。

こうして巽の長い夜は幕を閉じた。

…そして迎えるのは地獄のような日々であると誰も知らずに。

プロローグ（後書き）

文章力の勉強がてら他の方の二次創作を読んでいたら、いつの間にかこんなものを書きあげてしまった…

一応他にも連載しているのに…

正直この作品の執筆を続けるかは分かりませんが…書きたいなあって思った時にちょこちょこ書いていきたいと思えます。

もし続編を読みたいと少しでも思ってくれた方がいらっしやったら感想お願いします！

そしたらきつと一生懸命書き始めるので…

第1話（前書き）

なんで更に長くなってるんだ…

第1話

ざくっ…ざくっ…

やたら背が高くやたら大人びている高校生、巽怜が通う学校の校舎裏にはほとんど人がよりつかないようなデッドスペースがあった。広さにして10m×30mといった平地に温かな日光が適度に注がれ、適度に木陰ができている夏でも意外と涼しいスペース。

設立当初からほとんど使用されなかったスペースなのだが、以前この学園を治めていた前校長が趣味の一環として、この場所を使って家庭菜園ならぬ学園菜園を設けていた。

日光が適度にあたり、水はけも良かったこの場所では2ヶ月に1度は何かしら作物が収穫でき、それらを心やさしい前校長は親元を離れ寂しくも有り、また健康に気を使わなくなった子供たちを心配して無料で配っていた。

学園菜園は当時なかなかの人気を博し、収穫物が大量に取れた日には学生や先生がこぞってこの校舎裏へとやってきて、前校長の善意を受け取る。

しかしそれは前校長がご勇退されたことで急激に鎮火していく。

だれも前校長の代わりに学園菜園を世話することもなくなり、次第に学園菜園を知る者たちも卒業や転勤といった形で学園を去っていく。

学園菜園の利用は科学の高度成長に反比例するように陰をひそめるようになる。科学の発展は著しいもので昔は収穫物がとれるまでに時間を要していた農業も、現在は新たな有機肥料が作られたことによつてほとんどの野菜が1カ月に数回収穫を得られるほどの効率化が進んだ。

それによって市民による野菜の価値観というものが極端に減少、その有機肥料が高価なためもあってか自分で作るには時間と手間がかかりすぎてしまい、倦厭されるようになっていった。

そんな時代背景も有り、下駄箱から歩いて5分ほどかかるうえに、陰になっていて隠れているわき道を入っていかななくてはならない校舎裏にひっそりと設けられていた学園菜園は寂れていく一方であった。

しかしそれは今年の春までの話だ。今年の春入学してきた男子生徒が入学後すぐさまこのスペースを見つけると、教師に頼め込んでこのスペースを借り受ける。

そしてこのスペースを利用して彼は学園菜園跡地を利用して再び農業を始めた。

それが異怜である。

農具や少しばかりの肥料は校舎裏隅に建てられた小さなプレハブ小屋に残っていたものの、それ以外はまるで手つかずの大地。

雑草は生い茂り土壌は固くなっていて、とても作物ができる環境ではなかった。

しかしそこであきらめる少年ではなかった。

借り受けてから1週間、まず彼は草刈りや、腐葉土や土壌改良剤を土壌に梳き込み農地としての再生を行った。

授業については基本的に不真面目で補習の絶えないような学生生活を送っていた異だが、学園菜園に関しては一切の手抜きを行わず、真摯に学園菜園を使用していたと言えるだろう。

…もちろん不真面目な彼がそこまでするのは理由がある。

「よっしや〜！これで今日からまた野菜が食えるぞ〜！！」

それは財布の中が通年極寒である彼の食糧補給というただ一点のくもりもない理由であった。

巽怜は現在幸せをかみしめながら帰り道を悠然と歩いていた。

右手には白のビニール袋：中には今日採れた新鮮な自家製野菜が大量に入っている…をしきりに見ては、今日の晩御飯のことで頭がいっぱいといったところだ。彼の幸運を示すかのように空は晴れ渡り雲ひとつない青空でとてもすがすがしい気分にしてくれた。

ずっしりと右手にかかる重みを『これが幸せの重みなんだなあ…』と、何もかもを幸せと受け止めてしまっほどの幸福感を巽は感じている。

「やっぱ今日は上条がいないからこんないい日なんだろうなあ〜！」
現在極度の絶頂感を味わっている巽だが、普段から幸せな日々を送っているわけではない。

普段の彼は街に出れば不良にからまれ、買い物に行けば財布を落とし、公園でのんびりしていればビリビリ中学生に見つかり追いかけまわされると不幸のオンパレードなのだ。

その所為もあってか彼は極貧生活を送っているのだが、この不幸エピソードには大抵の場合一つの共通点があった。

それはただ一つ、彼の高校のクラスメートでありもつとも気心知れた仲である『上条当麻』が関係している…ということだ。

上条当麻とは一言で言うなら『不幸な少年』だ。

ツンツンとした短めで黒髪の少年で、かなりのバカで運も悪い。能力は持っているものの、『システムスキャン身体測定』では測定することができない特殊性のため、学園都市最弱であるレベル0と位置付けられている。

レベル0に位置付けられたことだけでも奨学金や補助金の額が減らされ不幸であるのに、上条当麻の場合はそれだけに収まらない。

困ってる人を見れば老若男女、自身の危険一切顧みず助けに行く性格が災いして、トラブルに事欠かない生活を送るはめになっているのだ。

困っている人を助けている際に不良にからまれる、自身の財布をなくす、ビリビリ中学生に追っかけられるといった不幸に巻き込まれて、これだけにとどまらず目覚まし時計の電池切れで遅刻すること多数、犬が急に吠えだしてかみついてくる、バス停で待っているのにバスが止まらない、といった小さな不幸が重なって超特大の不幸を形成するような男だ。

それゆえ彼の近くにいることが多い巽も同じように不幸を受けることが多かった。

巽は何かに気づいたように一度当たりを見渡して、誰もいないことを確認するとほっと息をなでおろし再び帰り道を闊歩していく。

どうやら彼の周りに上条当麻はいなかったようだ。

「そうだよなそうだよな。今日は上条の奴小萌先生の補習だったからまだ学校にいるんだし……」

ちよっと神経質になりすぎかな？とちよっとばかり反省をしながら頭をぼりぼりとかく。

今日もびっしりと固まったオールバックの髪型は少し掻いた程度じや乱れないらしく、手を下した後も髪型は先ほどとまったく変わることなくその威圧感を存分にはなっていた。

「昨日携帯がぶっ壊れたばかりだし、そんな不幸なことなんか続かわけないよな！だってこんなにもすがすがしい天気！歩行者が誰もいないから解放感満点だし！」

歩行者がほとんどいない通りのど真ん中を堂々と歩いて行く。堂々と言っても両幅6m未満であるこの細い脇道は知る人ぞ知るいわゆる抜け道で、この道を通ると通らないとで徒歩時間が10分は変わってくるのだ。

普段は数人抜け道を知っているつわものとするれ違つこともあるのだが、今日に限ってそういうこともない。

まるで自分のために道を開けてくれた、と感じているのは巽ならではの能天気故だろう。あとは曲がり角を曲がってまっすぐと歩いていけば大通りへと再び出て、そこまでいけば巽が住む学生寮まであと少し。

…のだが巽の意気揚々とした歩みは曲がり角を曲がったところで急に止まってしまった。

「はあ…今日くらいゆっくりさせてくれよ…」

先を見据えた巽は肩をがっくりと落としたため息をついた。

視線の先には男性が一人に女の子が二人。

花飾りを頭に付けた少女と腰のあたりまで髪を伸ばした少女二人が金髪を上条当麻のようにツンツンと立たせた男に頭を下げ、男は男で女の子たちよりも10cm以上の身長差があるからか腰に手を当てながら女子二人を見下ろしている。

もしその3人が笑っていたり、頬を染めていたりするのならほほえましい光景…いや後者だった場合舌打ちの一つも決めかねないが…だと誰もが思うかもしれない。

ただ今回の場合女の子たちは必死に頭をペコペコ下げていて、男はそれをニヤニヤ観察しながら大声をあげ、そのたびびくびくする女の子たちを見て面白がっているように見えた。

客観的に見るとどうしても男が女の子たちをいじめているようにしか見えない。

巽からは男の姿が邪魔をしてほとんど見えないが、それでも女の子

たちが二人とも体を震わせていることは遠くからも見て取れた。帰り道である大通りへと向かうにはあの横を通り過ぎないといけないのだが、黙ってそれを行うには少しばかり異は正義感が強かった。

「ぶつかつてきといて詫びも何もないんですかあ！ああ〜ん？」

「ご…ごめんなさい！」

「私たちが不注意だったばかりに…」

「あああ！？聞こえねえぞ！」

「ごめんなさい！！」…ぐすつ。」

もう何度目になるかわからないが、少女らは誠心誠意真心込めて男に対し頭を下げた。

少女たちが必死になってまで頭を下げるのには訳がある。

時は少し遡り少女たち…初春飾利と佐天涼子はそれぞれ今日という日を待ち望みにしていた。

初春は所属する『ジャツジメント風紀委員 第一七七支部』の同僚である白井黒子との約束を、佐天は自身のお気に入りアーティスト『ひとしほ』のアルバムめの発売日を、それぞれが毎日の生活の中で今か今かと感じていた。

そして当日を迎えた二人はそれぞれが異なる用事があったのだが、偶然というべきか初春の見かけによらない強引さからか初春の約束の待ち合わせ場所に2人で行くこととなる。

そして待ち合わせの場所に向かう際に事件は起きた。

雲ひとつないすがすがしい天気なのだが、その所為か昼の2時前のこの時間暑さがピークに達しつつ我慢できず、佐天は待ち合わせの場所までに缶ジュースを1本買い飲み歩きをすることにした。

初春には行儀が悪いと言われたものの、刻一刻と増していく暑さに聞く耳を持たない。

佐天が缶ジュースの中身を半分ほど飲みきったところで、2人は佐天の指示に従い大通りから細い路地へと入っていく。

佐天曰くなんでもここは知る人ぞ知る通り道で、ここを通れば10分は近道ができるらしい。

説明を終え狭い路地へと曲がった時、運悪く丁度路地から出てくる人と佐天は交錯してしまった。

突然の出来事に驚いた佐天は暑さにより表面に水滴がついた缶を手放してしまう。缶は重力に引かれ地面へと落下し、そして半分ほど入っていた中身を周りにぶちまけるように吐き散らす。

ジュースは佐天の隣を歩いていた初春を含めた3人の足元に飛び散った。

「すみません！」

佐天はすぐさま自分の非を認め、ぶつかった黒のタンクトップに足元がぬれた藍のジーンズを身に付けた金髪の男に詫びを言った。

佐天の起こしたことが初春も一緒になって男に謝る。

しかし男は許すことはなかった。

2人が非を認めたことにより調子に乗った男はひたすら大声でどなり続けた。

内容はほとんど変わらず謝罪の言葉とお礼を求めたものだけだったが、たつたそれだけの内容で15分以上どなり続けられる男もなかなか凄いのかもしれない。

15分も有ればだれか警備員や風紀委員を呼んでくれていてもよさそうだが、2人にとっては不幸なことに周りの人たちは我関せずと言った具合で狭い路地に入ってくるような人すらいない。

たまに路地の先からやってくる人もこちらを見ないようにこそそこそと脇を抜けていくだけだ。

佐天は助けを求めるように再度辺りをこっそりと見渡す。

しかし人通りの少ないこの路地に、その視線を受け取るものはいな

い。

そうはいつでも誰かに助けを求めずにはいらなかった。

それは自分自身が助かりたいという思いからではなく、佐天の親友であり自分と一緒に頭を下げてくれている初春を思つての行動だった。

そもそもこの路地を通ろうとしたのは、初春と約束をしていた白井さんと常盤台のレベル5との待ち合わせに間に合うように近道をしようにとしたからに他ならない。

そしてその近道を提案したのは佐天自身だった。

常盤台のお嬢様に会うことに関しては躊躇いを感じていたが、それと親友の手助けをするのはまた別である、と初春を思つて近道を教えた結果このように余計な足止めを受ける羽目になってしまった。

佐天は時間が刻一刻と過ぎていく度に、澱みが溜まり心が重くなつていくようにさえ感じていた。

(私の所為だ…私がなんとかしないと…)

「あの…」

「あつ…なんだ？」

「ぶつかったのは私なので、どうか初春だけでも…」

「つつ…許すわけねえだろ!!お友達の失敗はそのお友達も同罪だ!!」

しかし佐天の願いは届かず、むしろ火に油を注ぐ結果となつてしまった。

私なら大丈夫ですから、と横で頭を下げる佐天に言う初春。

もういつ泣き崩れてもおかしくない精神状態の佐天。

男は2人の悲壮な表情を見て愉悦噛みしめていた。

つい半年前は小学生であつた2人とはいえ、女子2人を自分の思い通り出来ていることに優越感を感じていた。

だからそう簡単には男は許さない。

しかしそれは強制的に終わりを告げることとなる。

「大体な…ガツ!？」

「えっ…?」

一言また一言と2人を追い込むように口を開いたその時、男は突然後頭部にバスケットボールを勢い良くぶつけられたような衝撃を受け、たまらず前のめりになってしまう。

そんな男の様子に初春、佐天の両名は呆気に取られ何も反応出来なかった。

「その辺にしたら？中学生相手に大人気ないぞ？」

男は突然の衝撃に倒れることはなく、後方から発せられた声に振り返る。

初春、佐天もそれに合わせるかのように視線をずらし、路地の先を見つめた。

「まったく…ナンパすんなら相手選べっつーの。その子らまだ中学生だぞ？」

視線の先には制服姿に学校指定の鞆とスーパールの袋を持った、身長がこの場にいる誰よりもはつきりと高く、髪をオールバックにした男子生徒が1人悠然と立っている。

彼…異と3人の間には10m程の距離があるのだが、この距離からでも初春、佐天の両名…さらには男も見下ろされている感覚を抱く程の身長差に、男は一步後ろに引いてしまう。

「あれあれびびっちゃってんの、お兄さん？たかだか高1のガキ1人相手に？」

その一種の気後れを巽は見逃さず、男を嘲笑うように挑発する。

初春、佐天には生きた心地のしないような物言いだ、これは巽なりの2人への配慮だった。男はその一言に…そして咄嗟に下がってしまった自分自身に怒りをふるわせる。

そして巽を敵として認識し、体ごと巽に対するように向きを変えた。この結果初春、佐天は男の範疇の外に出る。

巽は自分に関心を集中させようと、あえて挑発を行ったのだ。

…ただ真実を口にしたまで、とも巽は考えているが。

「てめえ…何もんだ？」

「そんなん聞いてどうすんだよ？オウムにでも教え込むのか？」

「もしぶつ殺しちまった時、墓を建ててやるうかと思ってよ。ほら、遠慮せずに言ってみな。」

「無能のあんたに負ける気ないんだけど…」

と巽がため息を吐こうとしたその瞬間、男は右手を高く頭上上げ手を広げた。

すると突然周囲の風が男の手のひらに集まるように逆巻く。

初春は花飾りを、佐天は自身の長髪が飛んでいきそうになるのを必死に押さえていた。

もちろん離れた位置にいろとはいえ巽のオールバックはみじんも変わらない。

「俺をその辺の無能力者のクズと一緒にすんなよ…俺は『エアロボール空力球体』レベル3。てめえの能力と似たようなもんだ。」

「…はっ？」

「しらばっくれてもてめえも同系統の能力者だつてことは分かつてんだよ！さつきてめえが俺の後頭部に不意打ちしたのも、それを使つてだろ？」

「…バレちゃ仕方ねえ。俺は『エナジーボール生命球体』レベル2…同系統つちや同系統かもな。」

巽は不適に表情を浮かべたまま、能力を放つ寸前の相手に対しいまだに鞆と袋を持ったまま無防備な状態を維持していた。それがまた男を刺激する。

その一種の気後れを巽は見逃さず、男を嘲笑うように挑発する。

初春、佐天には生きた心地のしないような物言いだが、これは巽なりの2人への配慮だった。

男はその一言に…そして咄嗟に下がってしまった自分自身に怒りをふるわせる。

そして巽を敵として認識し、体ごと巽に対するように向きを変えた。この結果初春、佐天は男の範疇の外に出る。

巽は自分に関心を集中させようと、あえて挑発を行ったのだ。

…ただ真実を口にしたまで、とも巽は考えているが。

「おい…てめえ…さつさと能力を出しやがれ。せつかくだから力比べといこうじゃねえか…」

「…いや、わざわざ能力使わなくても勝てる相手に、どうしてそんなことしなきゃなんないんだよ。」

「っ！？…そうかい…ならこいつを食らってから考えを…改めるんだな！！」

戦いのゴングが鳴り響く。

男は右手に発現させた能力、空力球体をドッジボールの要領で巽に向かって力強く投げた。

空力球体は重力の影響を受けることなく、巽の顔面を掛けて真っ直ぐに進んでいく。

その速度は時速にしておよそ80km。

両者の間にある10m程なら1秒とかからずその距離を埋めてしまふ。

巽は予想以上のスピードに慌ててしゃがみこんで頭を下げ、空力球体を避ける。

…が空力球体はあろうことか急に沈んだ。

「なっ!？」

回避に成功したと思いついていた巽は、再び眼前へと迫る空力球体に驚嘆の声をあげる。

目の前に迫る空力球体に気後れしてしまうも、慌てて片手に持っていた鞆を盾にする。

そして空力球体は鞆にぶつかると同時に、爆発したかのような突風を発生させた。

それは鞆ごと巽を吹き飛ばすのに十分な威力を秘めた風速を出し、それを受けた巽はその通り転がるように後方に弾け飛ばされた。

「俺の空力球体は風の塊から出来てんだ。空気抵抗と回転数さえ調節すりゃあ変化させるなんてチヨロいんだよ!ハッハッハ!」

吹き飛ばされ巨体を地面に伏せている巽を見て、男は見下しながら高笑いを始めた。

そして佐天の顔には絶望感が再び漂い始めた。

せつかく現れた救世主があっさりとやられ、元の木阿弥となつてしまったのだから。

しかし親友の初春は男の能力に怯えはしたものの、佐天と違い顔を上げスカートのポケットに入れていた腕章を取り出した。

「風紀委員です！民間人への能力行使は犯罪ですよ！」
ニタニタと笑う男は不意にかけられた大声に、意外なものを見るかのような反応を見せ、初春の腕に巻かれた緑色の腕章を見ていた。それだけのことで初春にとってはとつもないプレッシャーを感じていたが、それよりも風紀委員としての自覚が奮い立たせた。先ほどもでは自分たちに非があると考え、理不尽なまでの状況に納得していたが、能力による暴行を行ったとなれば話は別である。震える体を必死に抑え腕章を見せつけるように悠然と構えた。

「おいおい…いきなり威勢が良くなったなあ…お譲ちゃんよおつ！」

男は再び右手に卵一つ分程の空力球体を作るとそれを勢いよく地面にたたきつけた。

破裂音のような音が発生しコンクリートが舞い上がる。

初春は男の威嚇に短く悲鳴を上げ、再び委縮してしまった。

「おつと…ちよ〜つとばかりしやりすぎちまったかなあ？風紀委員とはいえまだガキだもんなあ？」

男が空力球体をたたきつけた場所に小さな穴がぽっかりと空いている。

その威力に2人の少女はただ顔を青くしていただけだった。

「俺を捕まえる前にまず悪いことしたお譲ちゃん達を叱らないとなあ？」

再び右手に小型の空力球体を作り、にやにやと見下ろしてくる男。

初春、佐天は顔を伏せ歯がゆい気持ちをかみ殺すのに精いっぱいになる。

「十分叱ってんじゃねえか、このロリサドが…」

「あん？…ガッ！？」

初春と佐天からしたら突如男が横に吹き飛ばされたように見えただろう。

男は再び聞こえた巽の声に振り替えると同時に、右頬にハンマーで殴りつけられたかのような強い衝撃を加えられ体ごと吹き飛ばされた。

男の体は横転するように勢いよく倒れるとその狭い路地のためか、壁に体を激突させずるとスライドさせていく。

そして男の代わりとばかりに2人の前に立つ影が一つ。

横たわる男に代わって初春、佐天の前に立っている男は巽だった。吹き飛ばされたものの恵まれた体格により衝撃に耐えることのできた巽は、男の能力である空力球体によって作られた砂煙に乗じて近づき男の頬を全力でぶち抜いたのだ。

…ようはすきを突いてこっさり後ろから近づき、不意を突いて一撃必殺になりかねない拳を振りぬいたただけなのだが、2人にはさぞかし救世主のように見えただろう。

「なにボーっとしてんだよ！早く逃げるぞ！」

「えっ…えっ…っ!？」

不意に手を掴まれた佐天は引っ張られるがままに路地の奥へと走っていく。

初春もそれを見て倒れたままの男を心配しつつも、ぺこりと頭を下げてから横を通り過ぎて行った。

走ることで5分、路地から大通りへと出たところでようやく巽は足を

止めて引つ張っていた手を離した。

男子高校生の脚に合わせるように無理やり走らされていた佐天は息絶え絶えに呼吸を紡ぐ。

それは初春も同じで、途中から速度の落ちた初春の手を佐天と繋がれていない手で引つ張って無理やり走らされていたので、風紀委員とはいえデスクワーク専門といってもいい初春の身体能力の限界値を優に超えていた。

それに対し巽は汗一つかくこともなく、また息も切れていない。先ほどまでいた路地の奥から男が追ってこないか、遠くを確認している。

「よし、撒けたな。…と大丈夫か？」

「あつ…は…い…。ありが…とうご……いました。」

初春は必死に呼吸を整えながら心配そうな表情を浮かべる巽に礼を述べる。

とはいえその巨体がかがませながら顔を覗き込むように2人の様子を伺う巽に、少しばかりの恐怖心を感じていたことは言えない。

「それなら良かった。それじゃあ今後はからまれないようにな。」
「いまだ膝に手をつけて息を整える2人の頭をポンと叩いて、巽は大通りの人ごみの中に混ざっていいこうとする。」

「…えっ？」

「ちよつと…待ってください。」

しかしそれをワイシャツをしっかりとつかんで離さない佐天の左手が阻止した。

「どうかしたのか？」

「あの…お礼がまだ…」

「ああ…そんなの気にしなくていいぞ。俺は今日機嫌が…ってああっ！」

引き止める佐天の手をそつと下ろさせ、ほらっと自慢するように右手を掲げた瞬間、巽は大声を上げた。

「ど…どうしたんですか？」

「…野菜置いてきちまった。」

そこで巽はほんの十分前よりも荷物が減っていることに気がついた。左手には学校指定のカバン。

右手は空。

男の能力、空力球体を受ける際野菜が傷つかないように壁際に置いてきたのを巽は忘れていた。

「不幸だ…上条がいないのに不幸だ…」

「あの佐天さん…なんだかこの方すごく落ち込んでますよ？」

「えつと…なんだか何かを置いてきちゃったとか…」

「ああ…せつかく計画してた『第3回！ドキッ！真夏のヘルシー鍋パーティー』を開催しようとしてたのに…」

息を整え終えた二人の代わりに今度は巽が膝に手を突く。

初春、佐天には巽の周りにだけ光が差し込んでいないような程の暗い雰囲気を感じ取っていた。

「あ、あの！」

「…ああ、俺は大丈夫だから…全然気にしなくていいから…所詮俺

は不幸連発の撒きこまれ人間だから…」

「…全然話聞いてないよ、初春。」

「…それくらい大事なものだっただんでしょうか？」

「うん…最近の若者は礼儀正しいねえ…3バカにも見習わせたいな…」

すでに2人の話をまつたく聞いていない巽を見つつ、初春、佐天の両名は小声で何かを相談している。

女子中学生がひそひそと話し、男子高校生が落ち込んでいる姿を通行人はけして近づかないように遠くから見ている。

いまだ落ち込む巽をしり目に女子の内緒話…といっても巽はまったく聞こうとしていない…が終わると、頭を下げる巽の方をちよんちよんと指で小突いた。

「あの〜。」

「あれ…まだいたんだ…。」

巽がそれに気付き顔を上げると笑顔の初春と佐天がそこにはいた。それはまるで天使のような笑顔だったのだが、精神が文字通り暗黒サイドに落ちた巽にはそれがまぶしすぎてか、なぜか一瞬悪い予感がしたのは巽の野性的な勘が働いたからだろう。

「私たち今からファミレスに行くんですけど、良かったらそこでお礼させてくれませんか？」

「…はい？いやそんな…」

「遠慮しないで下さいよ！それじゃあ行きましょうか！」

「はっ！？ちよっ…」

女の子二人に挟まれ腕を掴まれる巽。

中学生とはいえ女の子に手の柔らかさを直に感じ、顔を赤くしてしまふ。

上条というフラグメーカーが近くにいるため普段から免疫を作れない巽には、こんなハッピーイベントを起こされ反応しないなんてことは不可能だった。

そしてそのままお返しとばかりに腕を引っ張られ、無理やり巽の住む寮とは逆方向へとドナドナされていく。

女の子ゆえに力強く手を振り払うわけにもいかず、巽は顔を赤くしながらゆっくと2人に引っ張られていった。

…そして巽の悪い予感は見事に的中することとなる。

第1話（後書き）

感想ありがとうございます！

またも区切らず更新してしまいました、すいません。

せっかく感想頂いたのでちょこちょこ書いて見ました。

一万字越えないようにしたらあんなことに…
もっと練習しないと駄目だな…

それではまた気が向いたら続き書きます！

良かったら感想、助言、催促お願いします！

第2話 前編（前書き）

無理やりながらようやく話を分けることにしました。

…といってもまだ長いと思われませんが…

第2話 前編

「そうなんですか!？」

「こんなんで嘘つかないって。確かに去年まで柵川中学の生徒だったさ。」

「その…すごく身長が高いので、てっきり私たちよりもずっと年上なのかと…」

「これは…中学1年から160cmを超えてたからなあ…」

コンプレックスである背の高さにため息を吐く巽に、その隣を歩く初春、佐天は苦笑いを浮かべる。

巽の背は悠に180cmを超えていて、人ごみの中を歩いても1人頭一つ分抜きでて辺りを見渡せるほどだ。

現に初春、佐天の2人は巽に話しかけると、常に見上げて話しかけなければまるで胸と会話しているようになってしまっほどの身長差があった。

「そういえば今から待ち合わせているのは誰なんだ?てか本当に一緒に行ってもいいの?」

再度行ってもいいか、と確認しつつも待ち合わせ場所であるファミレスに在るであろう人の特徴を訪ねる。

巽からしてはあまり乗り気のしないことなのだが、『ついてきてくれるまで離しませんからね!』と先ほどまで右腕にしがみついていた佐天から(男としてはむしろついて行きたくなる)一言言葉おとなしくついて行くことにした。

ちなみに今は素直について行くことを了承したからか、腕を掴んで挟み込んでいた2人の少女は巽の隣に並んで歩いている。

「大丈夫ですよ!どうせ私も会ったことない人ですから!」

「白井さんも意外とやさしい人なんで、きつと許してくれると思

ますし。」

何度目か分からないほどの確認に、同じような答えが確認した数と同じだけ返ってきたが、結局これから行く場所には初春の同い年の同僚である白井さんと、その白井さんが通う名門常盤台中学のレベル5、学園都市第3位の能力『超電磁砲』^{レベルガン}の異名を持つ御坂美琴がいるということだけ巽は理解していた。

「『超電磁砲』…ねえ。なんかビームでも出せるんか？」

「本当は『電撃使い（エレクトロマスター）』なんですけど、御坂さんの最強最速の決め技である超電磁砲が広まっちゃったみたいで、主には電気を操る能力らしいですよ。」

「電気ねえ…なんかいやな思い出しかねえな。」

「急に冷や汗かいて何かあったんですか？」

「いや、つい最近…つっても約1か月前か。常盤台の制服着た電撃使いに襲われた経験があつてな。」

「襲われた!？」

「最初に襲われたのは俺の親友なんだけどな。その後常盤台のお嬢様とは思えないガサツな態度と言葉づかい、年上に敬語も使えぬ非常識さ、拳句の果てに明らかに致死量レベルの電撃で対応されちゃまってな。…あの時はマジで死ぬかと思つたわ。」

河川敷での男女の邂逅…といつてもまったく甘い展開ではない…を思い出し、巽は自然と冷や汗が滲みでてきていた。

「そんなっ!?!常盤台のお嬢様がそんなことするはずありません!」

「初春：あんたお嬢様に夢持ちすぎだつて。そういうエリートのほうが何やらかすか分かったもんじゃないんだから。」

その巽のいうことは初春の想像していたお嬢様とは180度違う印象だったらしく、飴玉を転がしたような声で必死に否定している。

佐天はというとお嬢様に対しあまり関心を持っておらず、むしろ嫌

悪しているようなそぶりを先ほどからしていた。

「まあ常盤台の中にも野蛮なやつはいるってことさ。それに今から会つのは常盤台のエースなんだろう？ だったらもっとお嬢様っぽくて品行方正な令嬢が来たっておかしくないさ。」

「そ…そうですよ！ その方はたまたま例外的に運よく常盤台に入れた電撃使用の方がかもしれませんもね！」

「どっちにしたって結局高飛車で能力でしか人を判断しないような人だって。」

「会ってみないとわからないじゃないですか、佐天さん！」

「はいはい、喧嘩すんなって。それより待ち合わせの場所ってあそこだろ？」

腕を上下に振りながら佐天に詰め寄る初春を落ち着かせようと、歩いて10分ほどしてようやくよく見えていきた待ち合わせ場所を、巽が2人の間に割って入りながら指さす。

指の先には赤くロゴが入ったファミリーレストラン『Joseph's』が事実交差点の手前に見えてきていた。

「あつ本当ですね。遅くなっちゃったんで白井さん怒ってないといけどなあ。」

「まあしょうがないじゃん。それより早く行こうよ、初春。」

「そうですね。え…つと…白井さんたちはどこに座ってるんで…えっ？」

初春は外から中の様子をうかがい、何かを発見しそのまま真っ赤になつて固まってしまった。

「どうした？ なんかあつた…はい？」

「…？ 巽さんまでどうしちゃったんですか？」

店内のある一点を見て固まってしまった2人。

その視線をなぞるように佐天は店内に目を向けた。

そこには窓際の5〜6人がけでコの字型にソファが置かれているテーブル席。

そしてそこに座る常盤台の制服の2人。

佐天はすぐさまこの人たちが待ち合わせの人たちだということに気がついた。

…しかし佐天も2人と同様に固まってしまふ。

その店内で待つ常盤台の制服を着た赤いリボンをしたツインテールの女の子が、もう一人の常盤台制服を着た短髪の女の子の膝の上に乗っかっていた。

いや乗っかっているだけならまだかわいらしい。

そのツインテールの女の子は短髪の女の子に大胆にも首に手を回し、嬉々とした表情で頬ずりをしていた。

その光景は一般人である佐天にしてみれば異常なものだった。

それは顔を真っ赤にしてジッと凝視している初春にも言えることだった。

…しかし巽に関しては全く違うことを考えていた。

「…悪い。俺はここで帰るわ。」

「えっ！？急にどうしてんですか？」

「ちよつと…急用を思い出してな。」

「あっ！こつち気がつきましたよ！」

初春が夢中になって今のうちにと、佐天に一言告げて逃げ…帰ろうとしている巽。

しかしそれは一步遅かったようだ。

初春の言葉を聞いて恐る恐るもう一度店内を見る巽。

そして店内ではいまだ頬ずりをやめないツインテールと…

巽のほうを向いて何か叫んでいる短髪の少女、御坂美琴がそこにはいた。

「え〜…改めまして…こちら、私と同じ風紀委員第一七七支部で風紀委員をやっています初春です。」

「う…初春飾利です！はじめまして！」

赤いリボンでツインテールにまとめた茶髪の女の子、白井黒子は軽く咳ばらいをした後、自身が敬愛してやまない御坂美琴と同僚の初春飾利の仲を取り持っていた。

本日ファミレスで待ち合わせていたのも、初春に自身が目標であり姉と称するほど尊敬してやまない美琴を紹介してほしいと予てから頼まれ、それを叶えるために設けた場だった。

とはいえ初春たちが来る直前にファミレス店内で騒ぎすぎたため、店員に注意されたまらずファミレスを出て、今は店の前に『し』の字を作るように立っていた。

初春は夢にまで見たお嬢様校である常盤台のEースでありレベル5の御坂美琴に会えたのがうれしいからか、顔を真っ赤にして普段よりも矢継ぎ早に言葉を紡ぎ、素早く頭を下げながら自己紹介をする。

「えっと…そちらの方々は…」

「初春のクラスメイトで親友の佐天涙子です。ちなみにレベルは0です。」

そんな自分の感情を隠しきれない初春の隣とは違い、無能力者（レベル0）を強調しつつ自分を卑下するように次いで自己紹介をするお嬢様である美琴にかなりのコンプレックスを感じている様子だ。佐天の態度に初春は慌てて佐天の方を振り向いた。

初春にしてみればその態度は失礼なことであると判断したためだろ
う。

「初春さんに佐天さんね…。私は御坂美琴。よろしく。」

それを美琴は一度確認するように2人の名前を呟いた後、軽い笑みを浮かべつつ簡素な自己紹介を述べることで返した。
それがまた2人のイメージするお嬢様とは離れていて、へっ?と意外なものを見たかのような反応を初春と佐天は浮かべた。

「…それであんたはなんでここに居んのよ?」

「いや…はははっ…」

さらに初春、佐天の横に並んで気まずそうな表情を浮かべる巽をにらむ姿は明らかにお嬢様といえるようなものではなく、180cm以上の巽にひるむことなくガンとを飛ばしていた。

「お姉さま?こちらの殿方とお知り合いなのですか?」

「ああ…ちよつとね。」

「まさか!?この殿方と妖しく猥らな関係などということとは…」

「そんなわけないでしょ!!」そしてついには明らかかな誤解を突きつけてきた白井に対して怒鳴りつけ、頭には電撃使いの名の通り青白い電撃が、ビリビリと迸っている。

「…全然お嬢様っぽくないね。」

「…それに能力をひけらかすような人でもなかったです。」

「…でもレベル5の割りには制御出来てないな。」

「そこっ!聞こえてるわよ!」

「そんな…お姉様!私というものがいながら、こんなウドの大木野郎なんかと!」

「なんだと!?やんのかチビガキが!!」

「…巽さんまで参加しちゃったよ?」

「…え〜つと、私達は止めればいいんでしょうか?」

店先で騒ぎ立てる3人に訝しむような視線を送る店員。

何事かと口論を繰り広げる3人に目を点にする通行人。

辺り全体の視線が自分達に集中してきたことに気付いたのは、冷静

さを保っていた初春、佐天の2人だけだった。

「白井さん！とにかく行きましょう！御坂さんも！」

「巽さん！ほらあつちで何か面白そうなことやってみますよ！」

と2人が無理やり引つ張るように、ヒートアップした3人を抑えなければあと数十分は言い争いが続いていただろう。

初春に引つ張られ落ち着きを取り戻した美琴と黒子は、自分達の行動を思い出し素直に頭を下げる。

本来ならゲストである初春、佐天を放っておいて騒ぎを起こしていたことに少なからず罪悪感を感じたためだ。

それは巽も同様らしく、しっかりと2人に謝罪していた。

…しかしその間巽と黒子は何度も睨み合い火花を散らしていたので、2人は引きつった笑みを浮かべることしかできなかったが。

「それじゃあゲーセンにでも行こっか？」

美琴が突然そんな提案をし、今現在近くにあるというゲームセンターに向けて一同は歩いていった。

前に美琴と黒子、その後ろに初春、佐天、巽と二列になるように横並びになっていた。

そうなると自然と列ごとに話は弾む。

「なんだかあんまりお嬢様、って感じではありませんね。」

「そりゃそうだろ。アイツがお嬢様なら世の中の大半はお嬢様だ。」

「もしかしなくても…巽さんは御坂さんと知り合いとか？」

「というよりさっき言ってた常盤台の学生って…」

「察しの通りだよ…。まさかビリビリがレベル5の第三位だなんて思ってもなかったわ…。」

「どうしてそんなことになったんですか？」

「コイツがストーカーしてたから…かな。」

2人にだけ聞こえるようにぼそりと指を差しながら告げる。

伸ばされた人差し指の先には、黒子と何かを話す美琴の姿があった。

「ス…ストー…カー？」

「常盤台のお嬢様が！？」

「ちよっ！？声がデカいから、初春！？」

巽は慌てて初春の口をふさごうと列から一步外れ、手を伸ばす。

しかしその時巽の体はぶつかってしまふ。

…前を歩いていた美琴に。

「ビ…ビリビリさん？」

巽に背中を向ける美琴は微動だにせず、うつむきながら不気味な雰
囲気を漂わせていた。

怒りだすでも暴れだすでもなく、直前まで話をしていた黒子との話
を打ち切つてまで何もしない。

おもわず巽は距離を開けようと一步下がってしまふ。

「あらっ、お姉さま？そんなにクレープが食べたいんですの？そ

れ…と…も…おまけの方が気になるんですの？」

「なっ！？」

しかしそれは巽の杞憂のようだった。

美琴は巽たちの会話を聞いて憤慨していたわけではなく、すぐそば
で配られていたチラシを注視していただけで、その内容があまりに
も美琴の気をひくものであったため立ち止まってしっかり見ようと
しただけであった。

黒子が何か面白いものを見つけたかのように美琴の持つチラシを横
からのぞき見ると顔をにやつかせ、それに反応するように美琴は顔
を赤らめた。

「おまけですか？」

黒子の発言を聞いて初春、佐天は横から覗き込むように美琴の持つ

チラシを見る。

そこには舌をぺろりと出しキューー ー人形のような姿勢のかわいらしく?デフォルメされた緑のカエルのストラップを、購入した人から先着500名にプレゼントするという移動式クレープ屋の宣伝が載っていた。

「べ、別にゲコ太がどう、ってわけじゃないわよ!だってカエルよ!?!?そんなの好きな人なんて...」

顔を真っ赤にした美琴がチラシを隠すように胸に一枚の紙面を抱きしめる。

その慌てっぷりからだれしもが『美琴がゲコ太なるカエルのストラップを好んでいる』という事実は判断できたのだが、それとは別にもう一つ確信できる理由ができた。

「ビリビリ...カバンについてるのなんだ?」

「へっ?」

抱きかかえるように腕を交差させた美琴の手には常盤台中学指定のカバンが握られているのだが、その美琴のカバンには先ほどクレープ屋のチラシに乗っていたゲコ太ストラップに似たものが、色違いで2つ繋がれていたのだ。

巽にそれを忠告されさらに顔を赤くする美琴。

恥ずかしさからか声を出すこともできないように、黒子、初春、佐天、巽を交互に反応を伺うことしかできない。

「じゃ...じゃあこのクレープ屋さんにも行きましょっか!」

「そ...そうですね!チラシによると新しくオープンしたばかりみたいですし、すごくおいしかもしれませんしね!」

「そ...そうよね!私もだから気になっちゃって!」

「お姉さま...今更取り繕うとしても遅いですわよ...」

「馬鹿にしてやりたいとこだが...さすがの俺でもちよっと惨めに感

じたからやめとくか…」
なし崩しに決まった行き先であるクレープ屋について話をする3人を、黒子と巽はため息を吐き一言こぼす。
結局クレープ屋に着くまで美琴のあからさまな話を合わせようとしている態度は変わらず、1人やたら大声で話していたのは誰も指摘することがなかった。

オープンしたばかりであるためか5人が到着した時点で10人ほどの子供や女性客が並んでいて、お店として使用しているピンクのワゴンの前にはちよつとした人ばかりができていた。
5人は到着するや否やすぐさま列の最後尾に並ぶ。

並ぶ際佐天は『先ほどのお礼をしますよ』と巽にクレープをおごるために巽より前へと並び、結果として佐天、巽、美琴という順に列に並んだ。

黒子と初春は佐天と美琴に自身の注文を頼むと、食べる場所確保のため近くのベンチの席取りに向かった。

余談だが並ぶ際にこの中で一番前に並んだらどうか？と佐天が美琴に親切心を働かせていたのだが、美琴はゲコ太ストラップなんていないから関係ないわよ、とあからさまに無理をしてあえて一番後ろに並ぶのだった。

「次私たちの番ですよ。巽さんは何を食べますか？」

「そうだなあ。クレープとか食ったことないから佐天のお勧めとかにしといてくれない？」

「了解です！それじゃあトッピングは納豆と…」

「やっぱ訂正！自分で頼むから！」

佐天が2人分のクレープを頼みゲコ太のストラップを一つ受け取る。そして巽の順番というところで店員さんは満面の笑みでオールバツ

クに決めた180超の巽に注文したクレープとあるものを渡してき
た。

「こちらチョコとバナナのクレープとゲコ太ストラップです。こち
ら最後の1つとなります。」

「ああ、どうも…って最後？」

「はい。おめでとございます。」

満面のスマイル0円でよくわからない祝辞をいう店員。

しかし巽にとってはそこが気になった点ではなく、本当に気になっ
た点は巽の背後にあった。

クレープとストラップを受け取ると恐る恐る背後を見る。

そこには先ほどまで早く時が過ぎるのを待つかのようにブツブツと
何か独り言をしゃべりながら片足で地団太を踏んでいたのだが、振
り向いたときにはその姿はなかった。

…代わりに地面に手を突き膝を曲げている常盤台のお嬢様兼レベル
5の姿がそこにはあった。

「そんなに欲しかったなら体裁なんか気にせず先に並んでたら良か
っただろうが…」

「…何も言わないで。」

「…ったく。これやるから元気出せや。」

先ほどまでよりも少し和らげに一言口にした後、巽は美琴に手を差
し伸べた。

その手には店員から今しがた受け取ったばかりのものが握られてい
る。

「本当!？」

美琴はその言葉を聞いてすぐさまうなだれていた顔を上げ、巽の手
を握る。

普段なら男性の手を握ることにためらいを感じてしまうのだが、そ

れよりも美琴にとつては念願のゲコ太ストラップを手に入れられることが最優先に考えることであった。

「…つてえっ？」

嬉々として巽の手を握る美琴。

しかしその表情はすぐさま戸惑いの表情に変わった。

巽が差し出した手…そこにはちゃんと店員から受け取ったばかりのチョコバナナクレープが握られていた。

「ふっ…はっはっはっ！騙されてやんの！やっぱりゲコ太が欲しかったんじゃねえか！ははははっ！」

ポカンとした表情を浮かべる美琴を見て、巽は辺りを気にすることなく大爆笑を始めた。

腹いてえ！とゲコ太ストラップの握られた手でお腹を抱えて、巨体を小さく丸めている。

「ふっ…ふふっ…あはは…」

巽の笑いにつられるように美琴も笑いだす。

2人して手を握り合いながら笑いあう…しかも1人は地面に膝をつけたままだ。

その光景は明らかに異質なもので、巽が注文した分のお金を払ってから列の横で待っていた佐天は苦笑いを浮かべていた。

その刹那、ダンツッ！！という短く壮大な音が佐天の目の前で発生した。

おもわずキャッ、と佐天は目を瞑り軽く悲鳴をあげてしまう。

突如何も変哲のない場所から爆音が響いたのならそれは当然の反応だろう。

佐天は恐る恐る目を開ける。

そこには何事もなかったかのように何かを拾い上げている美琴の姿と…

黒こげになり地面に伏している巽の姿があった。

「あっ、こんなところにゲコ太の限定ストラップが落ちてるじゃない。日ごろの行いがいいからかしら？」

「てめえふざけんじゃねえぞ！普通こんな電撃浴びたら死ぬぞ！」

「それじゃあ店員さん。私はいちこのクレープを一つと……」

「ガン無視すんじゃねえ！」

黒こげになっていた巽は満点笑顔を引きつらせた店員に平然と注文をしようとしている美琴に食ってかかる。

何事もなかったかのように注文する美琴の手にはなぜか先着500名がもらえる限定ストラップが無傷で握られていた。

第2話 前編（後書き）

一応伏線を張っているのですが、主に書きたいと思っていたことはほとんど後編に回すことにしました。

といっても後編はいつになったら書き始めるのかわからないので、書きたいこと忘れてるかもなあ…

よろしければ感想お願いします！

…モチベーションって大事なんですよ？（。 - 。）チラッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2326q/>

とある科学の能力模写（コピーキャット）

2011年3月20日21時40分発行